

暗い緑と調和して、なか／＼一寸したスケッチには畫けぬ。その松林の前に白い枯木が、ホワイトで抜いた様によると出て居ることもある。遠い東の山が夕日に映じた時は、如何にも冬の崇高な姿を感じる。

總て冬の複雑な色彩は、春夏秋冬の様に日向には求められない。暖い色。それは或は得られないことは無いが、變化の多い色は陰及び影でなければ見られない。さうしてそれがより多く赤味を帯びた紫を含むて居る。

おのれの告白〔下〕 長谷川利行

おのれはここに謝罪せなくちやあならないことどもがある。

第一、栃木縣の人江西藤十君は去る七月おのれに眞面目に水彩畫を研究し習作し交換を爲やうと、自分の目下の境遇などまで御報せになつてワットマン九ツ切位の御自筆の畫を送られたことである、おのれは早速畫なり片紙なりを差上げるべきはづなりしも、未だ未だ人様に見せる様なるものは出来ないし、おのれではこれで十分と思つた作品もないので何時か出来たら出来たらと最早半年も経過して來た、出来たら多少おのれにもいいと思つたのが出来たら手紙もあげたい御返事をだしたいと思つて手紙は半年も前にいろ／＼畫のことどもに就ておのれの意見やらを認めて置いたが今日に到つて其運びにならない過日ハガキを飛ばして置いたがおのれはこゝで言ふ例令眞面目に研究したり研究畫を作つたりして交換するに、人様の様にやうそれと御返事が出来かねるので、おのれの性分としてそれでも眞面目

に研究はおこたり無いし研究した結果創畫も作つて居るが、どうもこれでもいいと思つた畫なんぞは一年に一枚位か出来ない、勿論一寸としたいところがあつてもこれを人に見せてこれがおのれの研究して出来た寫生であるなどと美しいばかり自然の色彩に反してすましてゐる等といふことは嫌いである、おのれはこゝも信じてゐる、いまに寫生をやつてもあまり自然の色彩と相違のない色を出して描いて見せる、そうしなくちや到底眞に美しい立派な畫は出来ないものと信じて居るから、どうもおのれは江西君に申譯が無い次第である、出来たら御返事もするし畫もさしあげるをとしてあきらめて載きたい而して見込のない奴だ、畫家となつても藝術界に貢獻の出来る人間でないと思つても結構です、おのれは先輩の意見も聞きおのれ自身もよく吟味して終日の研究に怠りのないを告白して置く。

第二、おのれは昨年五月頃より肉筆の水彩畫ハガキの交換をやつて來た、本紙上でも廣告をしてもらつた位、この繪ハガキ交換もつくづくつまらむものだと思ひ、やりつばなし筆や眞面目を缺いたもの、苟も本會の會友とでも言はれる人様から、それらのものが舞ひ込んだので且つは驚き平向したのである、平向したと言ふのは返事を上げるのにどんなものを上げていいかためたふらのである、おのれもこれまでエハガキ等は馬鹿にしたものでやりばなしの不眞面目で押通して來たもの、これが普通の人なら知らず、又唯あつめるといふなら知らず、一體全體繪ハガキ交換は何にするためのものやら、おのれは侮辱された氣

持もした怒つても見た馬鹿々々しくなつた、でおのれは人から肉筆のエハガキ交換なんぞと言へば唯人々の面影をみつめる

ばかり位に興味はあるのだろうと推定した、おのれは小さくても書である、精神のこもつたものを望ましく、何より下手なら下手でいいから眞面目な眞直なのを得たい、何の効能もなく唯集めてやたらに、いいとか悪いとかよく出来て居る位にとどまつた肉筆畫のアルバムならおのれは、それは美しい花であるが實のならない花である、と惜しく思ふのである、これまで交換を申入れた諸君のうちでも、おのれの蟲のすくのは依然として交換して居るが、あやしいのは勝手ながら失敬ながら斷つてしまつた、おのれは思ふのに、肉筆エハガキ交換とは、人の描いたものをあつめて多愛もなく見てよろこんで居るばかり、他に何の見るべきものも認めないので、何か知らず疑つても見る、で、おのれは肉筆のエハガキ交換は廢した、と言ふのも多くの人を以て誇りとする様な肉筆エハガキ交換は望まないのである、眞面目であれば結構にもゆかぬが多少なりとも交換を申入れる位なら腕のある人だろうと思つてゐる、そりや下手でもいい、おのれはおのれの言ふことの了解出来る人様は交換を願ひたいのである、よつて永久に交換だとか、親友だとか、と文句の上手なのと二つはおとれはそんな人にはお斷りしたく、かへつて申込れると有難迷惑だと申し置く、これまで交換して來たのは、東京の鹽島仁君、京都の松岡君、兵庫の桑田君、和歌山の宮崎君、栃木の江西君等である、以上は畫會友の人々だが他にもあ

る、何卒今後もおのれはおのれの主旨方針が一徹したいもんだと願つて居る。

過日畫會友の人々へ、近縣から、おのれの昨年六月頃から十二月までのスケッチ寫生を六冊に自製し、一集十九葉づつ大小綴つて廻送した、それも一部分の人々だが、おのれは回送をうける人々へは、氣に入つたのがあれば進呈するから何かしるしを附して印鑑をおしてくれと言ひふくめて置いたからおのれの畫でも望手があれば結構だと言つて置く。

何はともあれ、昨今は暖くなつた、餅にも倦きたおのれは、今度は何に倦きるやら、畫道の研究は倦怠するどころでないとして置く、美なることは百花の粉亂を破るが如くて、健なることは寒嚴の松柏が立てるが如しと、おのれの達者なことをかされて申す。

過日の冬休暇二週間は、昨年も遊んだ金屋の奥峠屋へ行つた、それもどうやら猪がとれたかとれなんだとかで、おのれは水彩畫四つ切大が二枚、六つ切が二枚、他には鉛筆が一帳と、出來損ひの出來上りが若干とて山を下つて、おのれは、御題に叶つた新年の雪の圖を幾らか得たからとてホクホクしてゐる、おのれの近況はざつと斯かるものである、終りに短歌の數首も浮んだので一しよにつられて置く。

年一つ迎へたるのみ仰々しまた書初めと筆しづにとる

黒髪のみちかかるべき乙女子はお下さげに結ひて年禮にゆく

さまざまの深き思ひをめぐらして歌かるたとる君はかしこし